

＜基調講演＞里山・里海とは何か －岡山県日生地先でのアマモと牡蠣の里海創生論

柳 哲雄（九州大学応用力学研究所）

1. 里海とは何か

里海とは「人手を加えることで生物多様性と生産性が高くなった沿岸海域」（柳、1998、2006）を意味する。

里海に対する人手はその海域の生物多様性を高くするように加えられなければならない。ある沿岸海域の生物多様性は適度な人手（擾乱）と適度な栄養状態で最大値をとるからである（柳、2009）。

里海は生産をしながら、自然を保全する場なので、里海を支える主役は海の生産者である漁民である。しかし、日本の漁民人口は約 20 万人で、総人口のわずか 0.2%に過ぎない。残りの 99.8%の非漁民に、漁民と同様、沿岸海域を大事な場と考えてもらい、海を汚さない、豊かな生態系を保全する意識を持ってもらう必要があるが、どうすれば非漁民の海域利用者にそのような意識を持ってもらえるかが問題である。

子供に対する浜辺の環境教育をはじめ、様々な活動を行うことが必要であるが、そればかりでなく、大人による漁村体験や海岸調査活動なども行う必要がある。また、都市近郊の運河沿いに階段状の人工干潟を設け、その干潟の生態系変化を地元小学生とともにモニタリングするというような

都市型里海を設置するアイデアも有効であろう。

そして、問題となる沿岸海域の管理者・利害関係者（Stakeholder）・科学者が全員集まった協議会を立ち上げ、その沿岸海域のどのような使われ方が人々に最大の生態系サービスを与えるかを議論して、順応的管理方式で試行錯誤しながら、その沿岸海域への最良の関わり方を決めていかなければならない。

2. 岡山県日生における里海

岡山県日生町漁業協同組合では平成初期から 20 年以上にわたって、アマモ場を復活する運動を漁民が自主的に行ってきた。このような人手を加えることで、アマモ場が回復し（図）、減少していた定置網の漁獲量が増加した。さらに漁民は、底引き網を用いた海底のゴミ回収作業、春季の牡蠣養殖場底泥の耕耘作業も継続して行っている。

日生海岸沿いに繁茂したアマモ場は、多種多様な魚介類の子供を産み育て、腐植食物連鎖を通じて豊かな植物・動物プランクトンを生み出し、滋養溢れる牡蠣を育む。

多くの島に囲まれた静穏な日生水域一帯には牡蠣養殖筏の群れが広が



図 人手を加えることで回復した日生のアマモ場

り、牡蠣筏から吊り下がった牡蠣連は、アマモ場を巣立った育ち盛りの魚たちの絶好の餌場、遊び場になっている。

そして、魚たちは大きくなるにつれて、沖合いに旅立つ。かつては均一で平坦な泥場で、生き物の少ない砂漠のような海だった。そこに人の手によってオアシスが創られた。すなわち、牡蠣殻堆・貝床・人工礁などによって多

様なエコトーンが創出され、新たな生態系が出現し、そこに棲み付いた生き物たちによって新しい豊かな世界が作りだされていく。

さらに、この海で生み出されたものが、自然の力と人の手でバランス良く循環し、その繰り返しの中でさらに自然が豊かになっていく。これが日生における「里海」の実現である。

《参考文献》

- ・柳 哲雄(1998) 沿岸海域の“里海”化. 土木学会誌 ;21: 703.
- ・柳 哲雄(2006) 「里海論」 恒星社厚生閣.
- ・柳 哲雄(2009) 人手と生物多様性. 海の研究, 18: 393-398.